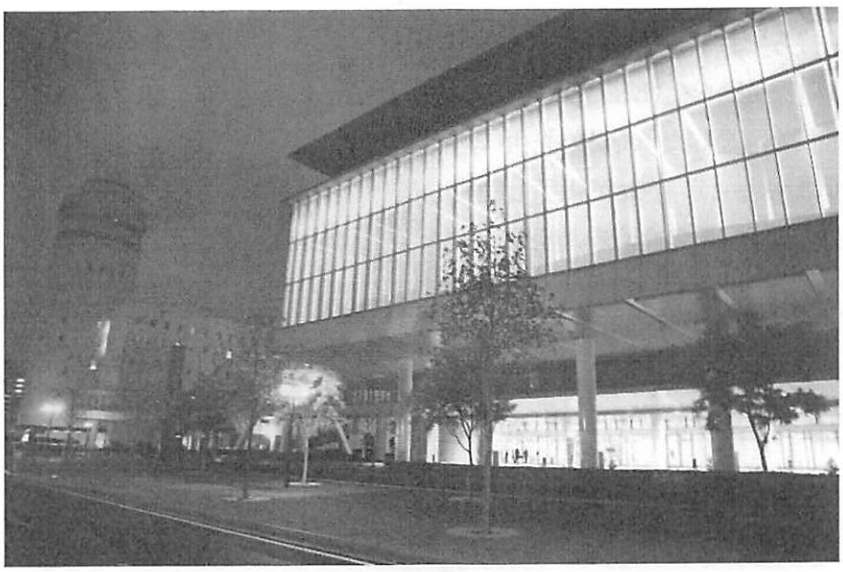
第20回 JASTRO 総会報告

淡　河　恵津世

平成19年12月13日(木) 14日(金) 15日(土) の3日間、早渕尚文大会長のもと、福岡国際会議場にて日本放射線腫瘍学会第20回学術大会（JASTRO20）を開催いたしました。教室としては早渕教授を中心に各種学術大会を開催してきたわけですが、放射線腫瘍学会は教授にとっては治療学としての原点となる学会ですので、私にとっても緊張した1年間でした。学会は3日間ですが、その準備は平成18年10月の日本医学放射線学会秋季臨床大会終了後から始まります。今回の大会のプログラムや運営の中心として貴重な経験をさせていただきましたので、印象、反省などを書かせていただきます。

日本放射線腫瘍学会第20回学術大会	会長	早渕尚文
	事務局長	安陪等思
	副実行委員長	江藤英博
	プログラム委員長	淡河恵津世
	副プログラム委員長	鈴木　弦



本来JASTROは例年11月末に開催されますが、同時期に大相撲九州場所があること、翌週には北米放射線学会（RSNA）があること等の理由で、12月の中旬、忘年会シーズンの福岡での開催になりました。福岡は11月の九州場所から12月年末にかけてとてもにぎやかになりますので、この時期の学会の開催はどうしたものかと悩みはありましたが、開催場所の都合もあり、年末の忙しい週末での設定になりました。開催場所は、過去2回教室でお世話した第28回頭頸部腫瘍学会、第42回日本医学放射線学会秋季臨床大会でも使用した福岡国際会議場（写真）でしたが、個々の学会で規模や特性が異なるため、学会会場、施設展示、機器展示、各種委員会の配置を改めて考えなければなりませんでした。学術大会運営に関しては、過去の学術大会の初回よりお世話になっている九州舞台にサポートをお願いし、事務局長は安陪先生にお願いし、帳簿関係と機器展示、全体の企画を担当していただき、私はプログラム委員長として、学術大会の内容の企画、抄録関係などを担当しました。JASTRO20の開催が決定した2年前には前年に開催した秋季臨床大会の準備段階でしたので、安陪先生からは「まずは秋季大会が終わってからね」といわれ、その後アメリカ遊学していましたので、帰国後の秋季大会では何が何だかよく解らないまま終わっていきました。ちょうどその頃、気分はアメリカ、特にハワイ風になっていましたので、学会を企画していくということがどんなに大変かも知らず、気づかず、「まあ、何とかなるでしょう～」といった甘い気持ちでおりましたので、安陪先生の叱咤激励を受けるたびに涙の反撃をしていました。（安陪先生ごめんなさい（--;））学会が終了した今、たった3日間のための1年間という時間がどんなものかということが理解でき、秋季大会後に安陪先生からいただいた訓辞の意味がよ～くわかります。ありがとうございました。

<企画について>

1．特別企画として2つ企画しました。まず、20歳になったJASTROについての歴史を阿部光幸京都大学名誉教授にお話いただきました。JASTROの歴史についてのお話を改めて聞く機会はありませんので好評でした。次に、放射線治療について一般の方々のお話をということで、市民公開講座の前に2人の市民の会代表の方にお話いただき、この後厚生労働省がん対策推進室の木村慎吾様にも来ていただきました。シンポジウムは高精度放射線治療を中心に、パネルディスカッションは前立腺癌と粒子線治療、そして（早渕教授が特に気を遣われている）女性医師の問題について企画しました。女性医師についてはちょうどMD Anderson Cancer CenterのKomaki先生が特別講演で来日していただきましたので、引き続き特別発言もご準備いただき、いい感じでまとまったように思います。女性医師のセッションが終わった後、Komaki先生が「Etsuyoさん、皆さん日本語が上手ねえ～！（ここで「先生も上手になられたじゃないですか～」とつっこみ入れてみた私）本当は日本語で話そうと思ったけどね、皆さん日本語がお上手なので、英語でお話しました。日本も女性放射線腫瘍医が増えていくといいですね。そのためには、今いる先生達が頑張らなくてはね」とおっしゃっていましたが、私の個人的な気持ちとしては、Komaki先生の御講演は英語だったからこそ心にしみていったように思います。

2．セミナー関係では、医学生・研修医セミナーは、北海道がんセンターの西尾正道先生、北海道大学の白土博樹先生のお話が大変楽しかったようで、未来の放射線治療医が福岡の講演を聞いて...というのも有りかな、とひそかに期待してしまいました。同時にパンフレットも作成配布しましたが、これは早渕教授の意見を基に安陪先生と鈴木先生、末藤先生が頑張ってくださり、何度も何度も校正の手直しをしたおかげで、なかなかよいできだったと思っております。看護セミナーは、今後の放射線治療専任看護師育成に向けて大切なことだと思い計画しました。現在、治療センターには専任看護師として木村さんが頑張ってくださっていますが、同じ看護師さんがいてくれるというのは、スタッフにとっても患者さんにとっても安心するものだと実感します、が、日本における現実問題としては、専任としてのポストがある施設が少なく、今後の問題かな～と思ったりしました。

3．市民公開講座

例年通りに企画していましたが、読売新聞社に広告等をお願いする際に「医療ルネッサンス」と一緒にしては？ということで、いきなり大きな企画になってしまい

ました。受付係を江藤先生と神崎さんにしてもらいましたが、聞くとことによると、400人を目標に集めなくてはならなかったらしく、学会近くになると毎日のように読売新聞より参加申込人数の問い合わせがあっていたようです。当日は予定参加者と（最終日の午後にもかかわらず）学会出席者も加わり、かなりの人数だったと思います。この時、前立腺癌の講演をしていただいた近畿大学の西村先生のところに江藤先生が国内留学をすることを、この時、誰も予知することはなかったわけですから、人生というものは不思議なものです。

4．初の試みとして

放射線科医の発明発表

この企画の思いつきは、数年前にJASTROの将来計画委員会主催の研究会に出席させていただいたときに、委員長より「発明したことは知的財産としてきちんと保護して皆に知ってもらえるように頑張ってくださいね」といわれたことが基になっています。調べてみると、色々な先生方が知らないところで発明発案をされていて、学会発表されたり、企業が説明されたりしているのですが、なかなかまとまった場所での発表がないのと、今後もより多くの発明が臨床現場から出ることを期待して、ちょっとわかりにくい企画ではあったのですが、初の試みとさせていただきました。反省点としては、展示のみになってしまい、口演発表の時間を作っていなかったことです。誰が発明したのかがもうちょっと前に出るためには、やはり口演発表をするべきだったと思います。実際の出展のほとんどは身内からの様な企画でしたが、

安陪先生のアンギオパンツも好評でしたし、色々な企業の人達も興味を持ってみてくれていたようです。私事ですが、マンマスーツも学会後にちょっぴり売れまして、昨年のE-companyの収益が赤字にならずにすみました(#^o^#)HAHAHA。

症例検討会

今回のプログラムの中で、もう1つ新しい企画としては、症例検討会だったと思います。これは、かねてから、診断の症例検討会があるから治療にあってもいいのではないか？という早渕教授のご意見からはじまったものです。症例の選択は教授自らしていただき、鈴木先生が準備してくれました。診断と異なり、解答が難しいと心配していましたが、治療の若手の先生方からは勉強になったと言っていただき、よかったと思っています。

＜Make A Wishとチャリティコンサートについて＞

秋季大会より連続して、安陪先生の立案により、Make A Wishへのチャリティも企画しました。私も小児がんの子供達の願いを叶える団体があるということは存じておりましたが、具体的に関わることがなかったため、本当によい勉強になりました。受付の一部にMake A Wishのブースがあり、透明のチャリティ募金箱が設置されていたのをお気づきになった先生もいらっしゃったかと思いますが、実は医学生・研修医の受付の横に設置していて、参加費は無料だけど募金もしていってね。。。という眼差しいっぱいに受付スタッフは頑張ってもらいました。当初、なかなか募金が集まらず、1万円を入れたり、理事の先生方をはじめ、たくさんの先生方に（半強制的に）募金していただいたり、努力の成果は充分にあったと思います。心配だったのは2日目のチャリティコンサートでしたが、示説展示の優秀者賞の表彰式と、KIRINさんにも御協力いただき、生ビールを飲みながらコンサートを聞いていただき、かつオークションもするというイベントは初にしては評判よく安心しました（安陪先生よかったですね)。オークションに関しては、早渕教授にお願いしソフトバンクの川崎選手の手袋や星野JAPANのユニフォーム、ANA協賛の商品等が並び、楽しく「落札」していただきました。私は残念ながら、Komaki先生が帰国前夜ということもあり、途中で退出しましたが、小児科の稲田先生（川崎選手の大ファン）から頼まれた手袋も児玉さんが見事に落札してくれて、そのお金は早渕教授が立て替えてくださったというエピソードつきで、よい想い出になったと思います。これがいつの日か私どもの関係する小児がんの患者さんの役に立つかもしれないと思うといいことしたな～という幸せな気持ちになったのは私だけで

はなかったと信じています。

＜学会参加者について＞

（人）	13日	14日	15日	合 計
正会員	716	214	42	972
準会員	243	77	26	346
非会員	157	41	6	204
看護師	9	22	13	44
後期研修医	1	1	1	3
医学生・前期研修医	75	11	49	135
看護セミナー	—	—	89	89
その他（招待等）	—	—	—	27
総　　計	—	—	—	1820

記者・取材　20人　市民公開講座　約400人

正会員972人、準会員346人、非会員204人、看護師44人、後期研修医３人、医学生・前期研修医135人、看護セミナー89人、特別招待等を含め約1820人の入場者となり、非常ににぎやかな学会となりました。

＜内緒話＞

1．学会テーマカラー

学会準備を始めるときに学会カラーを決めます。久留米大学が過去に主催した学会で使用していないのが暖色系であり、秋季大会がブルー系だったので、児玉さんが「開催日程が12月と冬の寒い時期だし、ピンク系とかどうですか？暖かい感じでいいですよね！」と提案してくれたので、サクラ色の様なピンクでということで決まりました。私としては特にピンクリボン等を意識していたわけではないのですが、乳癌学会がピンクを使うので抵抗がなかったのも理由のひとつです。しかし、実は早渕教授にはちょっと（かなり？）抵抗のある色だったということを申し上げておきます。（よく「ピンクね～？！」と言われていました）

2．学会バック

通常、学会時には学会バック等がありますが、今回もボールペンとバックを準備していました。ボールペンは白地にピンクのJASTRO20の文字でなかなかかわいい感じに仕上がりましたし、書き味もよく大変人気で最終日は足りないくらいでした。バックについてですが、当初よりエコバックにしようということで考えたのですが、できあがったものが、結構派手なピンクのエコバックでしたので、本来受付で１人１人に配る予定であったものを希望者にということで置くことになりました。女性には喜ばれる色かと思いましたが、男性が持つのはちょっと.....と心配し、また学会会場で男性がコレを持っている姿を想像できないという意見もあり、余ったらどうしようかと思っていましたが、結構なくなりまして安心いたしました。お土産にいくつか

持って帰られた先生もいらっしゃったかも…しれません。

よって、参加された先生方の印象の中には、福岡であった第20回 JASTRO はピンクの学会だったという印象が残ったかもしれません。とある先生から、わざわざ呼び止められて「『この色って、淡河先生が決めたんでしょ？』と尋ねたら、（医局の）●●先生が『もっちろんそうですよ』って言われたよ」と言われました。確かにそうだけど、こんなにピンク色になるとは思ってなかったのですよ、本当に….。

JASTRO という大きな学会を企画するという経験をさせていただき、早渕教授には感謝しております。学会を無事終了して思うことは、準備期間中に治療センターでの仕事が充分に出来ない時、イヤな顔をせず日常業務をしてくれた治療センターのスタッフの皆さん、学会に関し御協力いただきました教室の先生や技師の方々、九州舞台のスタッフ、メーカーの方々に心より感謝申し上げます。無事に終わって当たり前ですが、無事に終わるためにどんなにたくさんの人々の力が必要であったかを実感することができ、誰が欠けても成功しなかった学会だったと思いました。

本当にありがとうございました。